

龍部
四面の仏体

前面
(不明)
法印地蔵

右側面
(不明)
鶏籠地蔵

背面
陀羅尼地蔵
金剛願地蔵

左側面
閻魔大王
閻魔大王

前記銘文によると、清信という男性が、若くして死ぬ妙爾信女のために、冥福を修して造立した六地蔵である。その他は下府坂の銘文を参考されたい。

それぞれ成、なぜこの道のべに造立したのであるうか。経の終りに、回向文を唱えるがそれによると、

「願はくば此の功德を以て普く一切に及びし、我等と衆生と皆共に仏道に成ぜんことを。」

この願望からではあるまいか。(以上)

(前号の改正)

前号二七ページ、西野地蔵の元の六地蔵、禮身部四面のうち、此「阿弥陀如来は誤り、不空成就如来が正しいので訂正下さい。」

おしらせ

菅一郎先生の思い出

去る十月九日から十三日までの五日間、菅先生の遺作展が、佐伯文化会館で行なわれ、先生を敬慕する多くの人々に、深い感動を与えた。幸甚にすばらしいものであった。

先生は文談会の賛助会員として久しく、お訪ねして佐伯の古いことを伺ったり、お手紙で書いて教えて下さったり、「龍川舟遊八首」(中島子玉)の陰養の筆者花井惟棟の墓を、現地に案内して下さいたり、次号にそれらをとりに上げて、先生をしのびたい。(羽柴)

随想

下浦旅日記 (一)

米水津湾で考えたこと
主として浦代庄屋成松家と法華津氏との關係

在東京 会員 御手洗 一而

(米水津村出身)

数年來の計画を實行して、祖先の地である瀬戸内の島々を一通開巡遊し、続いて「下浦」といわれた米水津・入津・蒲江・名護屋と続く海岸を駆け足で廻り、やれやれと思つたにも心快い疲労も覚えた。そして一つ一つの資料を研究する糧として、メモ書きに記憶を整理することにした。

先ず考古學的に資料のない下浦地は、神武東征、景行西征の伝説や、紀記・風土記による調査から歴史上の知識と与えられる。土着原住民が海辺の白水郎として、海人族の流れをくむことは容易にうなずけるし、絶友の乱に活躍した佐伯是本の支配下にあったものと思われ。しかし天慶(九四)の頃の人口を、後世の落人の年代から逆算しても、大した数にならないと思われ。各浦に落人の流着・定着するのは、主に元龜・天正の戦国時代である。そして、この絶友の乱以後平穏な豊後水道に日本史上の動きをみるのは、平家落人の伝説である。下浦を廻ってこの伝説に興味をもつていたが、佐伯湾内の大入島に残る荒網代屋など、定着した伝説は聞かれない。勿論地域的に豊後水道と流れ落ちのびた平氏がいても不思議ではないが、源氏のしつような探索を考えると、子孫の生存までは困難であったのかも知れない。

だとすると、途切れた伝説の時代もあり得る筈である。平民蔵亡（治承四年二二八）の時代からは各湾に限ってその史実を追ってみたい。

米水津湾の歴史が、次に史実として現われるのが粟島神社の縁起である。懐良親王が伊予の忽那島渡御説の年次は種々あるが、延元四年（一三三九）をとると、阿蘇文書興國三年五月八日の日付で「征西將軍今月一日着御薩州御渡倫無異殊以目出度云々」とあることにより、親王が米水津湾の小浦に還避されたのは、興國三年（一三三二）の出来事である。（伊予史精義より）

さて、この出来事を伝えるには、湾内の特に小浦・竹之浦・浦代等に原住民の存在がなければならぬ。ここで古老の伝承が貴重になる。竹野浦庄屋の伝承では、御手洗一族が流着前に平家落人の故をすする人もあるが定かでない。また浦代はその当時原住民がいなかったと伝えられている。湾口から一つ抜けで風が吹きつける所は、昔から人の住み難い所だと伝えていいる。すると現在の船着場の状態からして、その当時は小浦が一番住み易く、原住民のいた可能性が強い。対岸の毛利・宮野浦は、その地名から当時では最も原住民の住みついた住居地と考えられる。この現象はのちに検証したいが、各湾の北側が落人の地として伝承も残り、南側はその伝承もなく原住民の住んでいた形跡がある。それから竹野浦に御手洗一族の流着が、応永廿年（一四一三）頃である。これは伊予の歴史と豊後史から実証出来る。ただし、御手洗には佐伯氏の容将という伝承もあり、伊予御手洗島から直接の流着地が竹野浦であるか、一旦佐伯氏に保護されたものかはつきりしないが前者である。この時代からは文献を調べても研究し易くなる。そして、元龜・天正の戦国

時代から、下浦一帯の歴史上の開花がある。各湾に共通の視点であるが、主として四国と関係のある落武者の流転定着である。神社仏閣の建立が、現在にその遺産を残してくる。

今度の墓参の旅で、浦代の高宮史談会員から、一つのヒントをいただいたのは感激であった。それは浦代庄屋成松家に關するものである。私は初め各村の長と庄屋との関係を想像していたが、こと成松家に關しては全くその予想を裏切られた。そして浦代の開墾が戦国時代からで、湾の入口から一つぬけの正面の土地は住み難いといふ、古老の伝承が実証された感があった。今でこそ村の中心であるが、中世は、小浦・竹野浦よりも住み難い土地だったのである。成松家に關する新史実は、大友義統の法華津氏に与えられた一枚の書状である。

その新史実に対する驚きとは、この一枚の書状が何故成松家にあるかということである。その謎は簡単であった。成松家は法華津の一族であった。法華津一族の支流が、浦代に流着して成松を名乗ったのである。落武者が流転後名譽を重んじるため、宗家の名を使わず改姓するのはよくある例である。

この書状から、幾つかの研究課題が与えられた。

① 法華津氏は、今の宇和郡吉田町の領主で七城を持つ。その領地内に成松の地名の有無。

② その一城である吉岡城に、竹野浦の玄蕃信好の次男が城代として勤めていたこととの関係。

③ 書状の年代。義統は天正六年（一五七八）に宗隣から家督を譲り受け、十六年の四月に秀吉の偏諱を拝領、「吉統」と改名。義統の書状はこの間の年代である。

④ 大友氏と伊予との関係は、元龜三年（一五七三）頃、宗隣が西園寺也土佐の一条氏の能戦に對して出兵してい

るが、この書状との関係は見られず。

⑤ 法華津一族の致敵は、秀吉の四國征伐の際、吉川元春が来子、西園寺公広・土居清良・法華津前延・御庄勸修寺基詮以外の三十四將に下城を命じた特で、天正十五年八月とある。(四國征伐は一忘十三年に終了)

⑥ なお、書状の黒田・蜂須賀は、鳥津征伐の際秀吉軍の先兵として、日向百川で鳥津義久の軍を破っている。この時が天正十五年の三月である。

⑦ 以上から、書状の十一月十六日は、天正十五年と見られる。法華津氏が保身の依頼を義統に託した返事と思われる。十四年か十五年か迷う所だが、九州平定のため、蜂須賀・黒田軍を先兵として、鳥津を日向に討ったのが十五年の春である。そして八月になつて、吉川元春が伊予に入り、四國平定後の治安に當っている。すなわち、西園寺公広と土居清良、法華津前延、御庄勸修寺基詮のみ在城を許し、他の三十四將の下城を命じている。後南伊予は戸田勝隆の所領となり、十二月には惣大将であつた西園寺公広を謀略にかけて滅ぼしている。このとき以後法華津氏は戸田氏より二百石を与えられている。手紙の日付けはこの間の事情を物語るものであろう。

⑧ そして法華津一族は四散したにちがいない。しかし、浦代養福寺の建立は天正九年とか、佐伯志には五年とも記されている。成松家以外の勢力を持つ豪族が、天正以前にいたとも思われないうが、尚研究の余地が残される。前記宗麟の時代の落武者も考えられ、この方が時代考証では合致するが、宗麟の時代に義統名の書状が法華津氏に於てられるとも考えられないう。

養福寺建立の年代と一枚の書状との関係に少しのずれはあるが、成松家が法華津一族であることは間違いない。御手洗と周知の間板であればこそ、次第に婚姻関係がすぐみられる。法華津は現在吉田町にあつた旧地名であるが、その出自は清和源氏とも清原氏ともいわれ、明らかでない。

以上で、浦代庄屋と法華津の関係が、戦国時代を通じて概畧的に把握できた。

次に「浦代観音堂十一面観音象起」である。成松又右衛門政則と、延宝二年十一月二十七日(一六七四)との時代考証は納得出来るが、前文はどうであるか。

藩江東光寺の縁起の書き出しと全く同じである。これらの観音象は事実として、鶴藩畧史にも韓圃からの漂着ではないかと記されているが、蒲江の茶師像にしても、浦代の観音像にしても、同じく入津浦の出来事である。年代は違つても、潮や海流の関係でどうしても入津湾に流れ着くものか、伝承的に何かの原因があるものか、神秘性をま感じさせられる。

成松家の古文書をゆつくり調べると時間になくて残念だったが、色利浦にもう一つ見落したものがあつた。

寛文四曆辰霜天吉祥日

佐伯庄色利浦位人

清原朝臣 高木與七郎

右一行廿七字者所寄附当村神社立岩神社廻り、銘也因而記于卷端而為後証矣

右の鱒口が、現存しているだろうか。
(出) 現存していない(高室)

伊能忠敬測量日記にある、色利浦大庄屋御手洗与七郎
と高木姓との関連が思い出された。

与七郎は世襲名である。「寛文四年」と「清原朝臣」、
これに成松文書を参照すると、色利浦庄産の変遷が解明
出来るかもしれない。

急ぎの撤収、終ってからいろいろと後悔が残るものだ。
しかし次の機会に楽しめが残るといふ慰めがある。思い
つきのまま書きとめて、次は入津湾に移ろう。

(つづく)

紹介

畑野浦の史談会のはたらき

入津湾の入口、は武戸鼻の海岸には、汀道に新しい鳥居が
立っている。実はこの夏は武戸神社の社殿新築が竣工し、その
境内につづく砂浜海岸と立派な公園がつくられた。その中心、動
力源となったのが本会を員高沢泰氏の率いる畑野浦史談会であ
った。このは武戸公園は、入津湾第一の景勝地となった。

畑野浦には本会の会員が現在十六人いる。この会員を
含む二十数名の組織が、ちりと、公園の造成、野花ハマ
ユウをはじめ、フェニックス・山もも、夾竹桃などの植
込みに挺身した。六七十才の老人たちが、ふるさとの環
境づくりの率先して当り、この夏は県から表彰された。

ふるさとの歴史め文化を切に思い、ふるさとの自然環
境をととのえることは、単に呼びかけられた位で出来る
ものではない。人々の、ふるさとに対するせつないま
への愛情と、共に働くことを喜びとする行動があつてのみ
可能である。

研究

わがふるさと 元田誌

二十四日の祭典

会員 市野瀬 仁
(弥生所大坂元田出身)

植松の愛宕神社は、大坂本・尺間両地区の氏神として
祭る昔の郷社である。

「釈慮愛宕大権現御縁起」によると、創立の歴史も古
く、慶長元年というから秀吉の朝鮮征伐の終りの頃であ
る。佐伯地方においては、大友氏が亡び、佐伯惟定は伊
予に走つてすてに四年後の頃であつた。

愛宕神社は代々氏神としての範囲も今よりもっと広く、
その神域の森にしても、神殿や石段や鳥居や石燈籠に至
るまで、格式の高いものであることは一見してわかるが、
佐伯藩主である毛利高慶公・高標公、あるいは豪商人の
奉納寄贈によるものであることからもうなずける。

広く世に知られている尺間神社は、この地方の崇敬社
であつて、愛宕神社創立より二十四年前の、大正元年(一
九一三)のものといふから、室町幕府滅亡の年で、豊後で
は大友宗麟の時代に当る。

さて両社の関係は「神武さん」の節で記したように、
慶長元年の大旱魃の時であつたが、それ以前にも深い関
係があつた。これについては「釈慮愛宕大権現縁起」に
次のように述べてある。

「飛尾山は御嶽より時ありて火玉飛下る事往々にして